

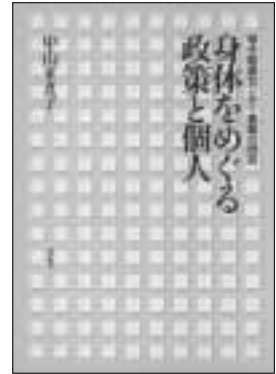
<書評>

中山まき子著

『身体をめぐる政策と個人
—母子健康センター事業の研究—』

(勁草書房 2001年 486頁 ISBN4-326-60142-6 9,500円)

波平 恵美子



1. 本書の特色：異なる研究方法の統合とその成果

本書の特色の第一は、①法令とそれに伴う制度の歴史的研究、②制度を現実化するうえでの行政の詳細な経過を追った歴史的研究、③出産を経験した女性のライフ・ヒストリー研究という、種類の異なる研究を総合的に行い、多種多様の大量な資料を整理し分析したことである。蒐集された資料の種類が異なるだけではなく、時代的にも明治初期から現在まで長期にわたり、研究対象の規模も、国家から個人まで、つまり国家の極大から極小の単位にまでわたっている。

こうした、時代的にも空間的にも広がりを持つ研究を著者が行ったのは、「性と生殖をめぐる身体の私的営為に対して行われた国家政策が、公私の重層的な関わりの中で、どのように地域社会や個人へと繋がり、個人の身体を規制し、既存の生活を変容させていくのか」(p.4)を明らかにすることを目的としたからにはほかならない。しかし、研究の中心対象は、1959年にはじめて開所された「母子健康センター」である。

先行の母子健康センターの研究から本書が抜きん出ているのは以下の五点である。第一に、現在では知られることの少ない母子健康センターは母子保健法によって定められた施設であるが、その法律が発案されて制定されていった経過の中で、国家が個人の身体のありようにどのように介入してきたのかを明らかにしたことである。第二に、一旦定められた国の政策が地方自治体に、そして個人に具体的に浸透していく過程を明らかにしたこと、第三に、特定の地域の母子健康センターの開所以来の資料の分析を通して、センターがいかなるものであったかを明らかにしたこと、第四に、国と地方自治体の関係を、一つの施設の詳細な分析によって明らかにしたこと、第五に、個人はそれが明治初期にさかのぼる国家政策に発していることを認識させられることなく、自分の身体に国家が介入してくる時、それを受け入れ身体についての認識を変えていく具体を、多様な資料の蒐集と詳細な分析で明らかにしたことである。

国民国家の成立時において、国家はそれ以前と異なるレベルと方法手段によって、国家の成員を把握する。一つには国民教育による知識と思考の方法の浸透、二つには身体性の国家化である。身体の国家化は多様な手段で行われたが、その一つが、妊娠・出産を国家が管理することであり、出産の施設化は、間接的な方法であったにしても、その後の出産の医療化を大きく進める要因となったことを、国家、地方自治体、地域、家庭、個人のすべてのレベルにおいて明らかにしたことは、本著の大きな成果である。

2. 本書の構成と研究方法の特色

本書は本文だけで429ページという大部なものであり、それに50ページにわたる詳細な資料が付せられている。著者が平成12年度にお茶の水女子大学に提出した学位論文のほぼ全体が収められたものであり、本論で記されている検証の対象となった多様な資料が、手際よく図表にまとめられて巻末に付せられている。

研究を進める場合、人文社会科学の研究者にとって有難いのは、このような詳細で丁寧な資料の提示である。「国民国家と身体化」という大きなテーマにおいては、大筋の結論を示したのみでは、後学のためには参考にならない。何をどのような方法を用いて、具体的にはどの程度の資料を蒐集し分析したのならば、かくかくの結論が出せるのかの具体が示されて初めて、研究は進展する。理科系の学問領域と比べた場合、一部の研究領域を除けば、人文社会科学では結論や分析内容を重視する余り、こうした基礎資料を公開することをなおざりにしてきた傾向がある。それに対し、本書は資料蒐集の方法手段も含めてその詳細を示している。今日の出版事情を考える時、出版社である勁草書房の英断を賞めたい。

全体は二部十章から成る。第一章は本書のテーマについて、第二章から四章までが「国家政策からみた母子健康センター」となっていて、明治初期から今日まで、政府が国家政策の中に母性や母子保健が組み込まれていった経過とその政策の中で母子健康センターが実現化していった法的整備を明らかにしている。第五章から九章までが第二部であり「地方自治体政策と政策の受け手としての個人 ―四国地方B町の事例研究―」として、B町が国の政策を受け入れて母子健康センターが設立され、個人がその施設で分娩をするようになり、やがて施設分娩こそが自然であり当然だと思ひ込むように変化していくことを明らかにする。第十章は、国家とその政策、その政策と地方自治体の政策実現、それが個人に受け入れられ個人の身体性として内面化する「三相」の関係について分析する。

多様で大量のデータを扱っているにもかかわらず、鮮やかな構成によって三相がいかに組み合わせられているかを結論づけている。

3. 資料と理論化への疑問点

著者は、先行研究と本書との差異を5点あげているが、そのうちの1点は本書が資料分析とフィールドワークに基づく事例研究という二つの異なる方法を用いて理論の産出を目指そうとする Grounded Theory（データ密着型理論）型の研究であるという（p.22）。そして、その成果は417ページの表10-2：母子健康センター類型良案とB町政策の位置として示されている。この表についての説明が414ページから421ページまで記されており、全国で設立された700余りの母子健康センターの類型化を目指そうとする。その類型を決定する要素として「国家政策の運営指導」「地方自治体政策」「自治体の自律性」をあげ、それぞれ α 、 β 、 γ 軸とし、その三つの軸が織り成すマトリックスの中でのそれぞれの母子健康センターの位置づけで分類するという。

しかし、書評者は、この分類がこの研究で果してどのような重要な意味を持つものなのか、その分類がなぜ「理論」であり、それによって新しく説明できることが何であるかについて理解できない。「理論」とはそういう種類のものであるのかという疑問を抱きながらも、著者の研究に注いだ情熱に、唯々感服する。

（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長・文教育学部教授）